（西日本新聞）
1989年(平成元年)1月26日 木

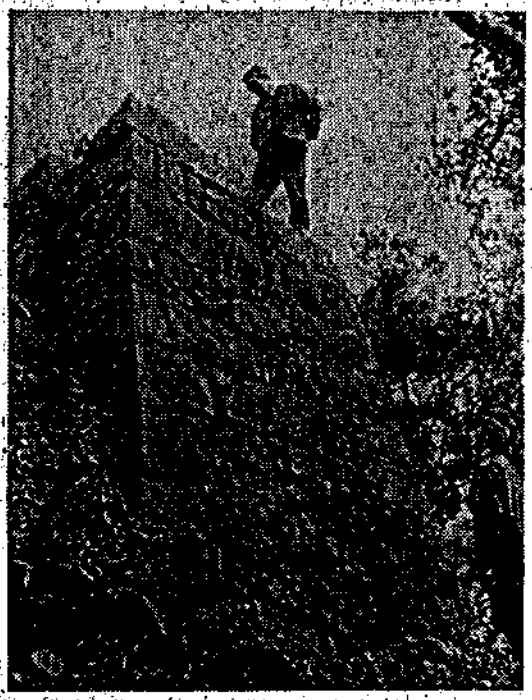
1/26西日本

# 海の歴史ロマン解明

## 厳原海保

# 藩政時代灯台跡

## 対馬海峡一望の立地



対馬厳原の耶良崎岬に残る石組みの藩政時代灯台跡

対馬厳原町の厳原港入り口にある耶良（やら）崎岬に旧藩政時代の灯台跡とみられる石組みがあり、厳原海上保安部灯台課は「灯台の歴史からみて貴重な遺跡」として解明を急いでいる。正確な資料はないが、かつて朝鮮貿易が栄えた対馬藩のおひざ元でもあり、解明されれば海のロマンを呼び起こしそうだ。

この石組みは耶良崎岬の山頂付近にあり高さ三・五メートル、底辺三メートル、頂辺一・九メートルの四角すい型。厳原港から対馬海峡まで一望できる絶好の場所に位置し「灯台の立地条件としては申し分ない」（同保安部灯台課）という。

「灯台跡」の存在は地元でも一部の人しか知らず、厳原湾の防波堤工事を始めた運輸省第四港湾建設局厳原分室の建設専門官・飯牟礼信幸さん（四）が「再発見」、同保安部や郷土史家に確かめてきた。

今のところ文献上、正確な設置年度を示す資料はなく、「対馬島誌」（昭和三年）に「耶良崎には藩政時代すでに灯台あり」と数少ない「証言」があるだけ。江戸時代、朝鮮貿易の基地だった厳原港では一六六〇年代、藩船の船着き場「お船江」など石で築いた遺跡が残っており、飯牟礼さんは「これらの事業と併せて灯台を設置したとも考えられることは説得力ある資料をする。一海上保安部刊の「日本灯台史」によると、灯明台と称した江戸期の灯台は全国で約百カ所設置された。しかし、現存する灯台跡は十分の一程度とみられ、厳原海上保安部灯台課は「古代、昔人が使ったのろしから発達した灯台の歴史上、対馬に最も古い灯台跡があっても不思議ではない」と夢を膨らませている。